



Title	開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査() : 総括
Author(s)	加納, 瓦全; 小関, 隆祺; 霜鳥, 茂
Citation	北海道大學農學部 演習林研究報告, 20(2), 471-509
Issue Date	1959-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20786
Type	bulletin (article)
File Information	20(2)_P471-509.pdf



[Instructions for use](#)

開拓地農家経営における農林提携 に関する実態調査 (VI)

総 括

加 納 瓦 全
小 関 隆 祺
霜 鳥 茂

Investigation on the Actual State of Intimate Connection of
Agriculture and Forestry in Farm Management, Especially
in the Newly Developed Land in Hokkaido (VI)

Colligation

By

Gagen KANO, Takayoshi KOSEKI
and Shigeru SHIMOTORI

目 次

	頁
序 言	472
I. 調査の方法と調査地の概況	473
1. 調査地の選定と調査の方法	473
2. 調査地の概況	475
II. 農家経済における林業の貢献	482
1. 農家現金収入と林業収入	482
2. 林業収入の内容	485
3. 農家現金支出と林業支出	488
4. 農家経済収支とこれに対する林業収支の影響	491
III. 労働力配分における林業労働の地位	495
IV. 農家の林野利用状況	501
結 言	505
Summary	508

加 納 瓦 全 北海道大学農学部林政学教室 教 授
小 関 隆 祺 同 上 助 教 授
霜 鳥 茂 同 上 助 手

序 言

太平洋戦争後、食糧の緊急増産と失業者の救済を目的として開拓事業が実施されて以来、すでに10数年の年月がすぎた。昭和32年3月までに北海道において開拓者として入植した戸数は42,052戸に達したが、そのうち13,420戸が離農し、定着したのは28,632戸である*。開拓の目的はその後、食糧増産と農家経済の安定向上におきかえられるなどの経過があつたが、戦後開拓が日本の経済において果たした役割は上記の戸数と照合してみても決して小さいとはいえないだろう。しかしながら、開拓の過程や開拓農家の経済についてはたくさん問題が存在したし、現在も問題をもっている。開拓を完成することなくして離農した者が非常に多く、定着率が68%にすぎないことをみてもわかるとおり、戦後の開拓は劣悪な自然条件、不安定な社会情勢のなかで非常な困難をともなつたものである。

開拓の実施にあつて、その成績を不振ならしめた原因はたくさんあげられるが、第一に劣悪な自然条件である。既存の農業地帯に比して気候、地勢、土壌、標高などの点で著しくめぐまれない条件にあつた。第二に入植した者はほとんど自己資金を持たなかつたことである。労働力は持つていても営農のための資本はもとより、生活資金にもことかかることが多いのが普通であつた。更にも、開拓建設工事のおくれや未完成などが営農不振に拍車をかけたことは否めない。

このような条件のもとで、開拓農業の確立は容易ならざるものであることは明らかである。農業からの収入が非常に少ない開拓初期において、農民の生活は主として補助金や農業外収入によつて維持されたことはある程度止むを得ない。

戦後の開拓地の多くは交通不便な山村僻地に位置し、森林地帯に接続し、または森林地帯のただ中に展開されるものが大部分であつたので、開拓農家は生活維持のために農業外収入の源泉を林業あるいは林野に求めたことは自然であろう。また、主として自然条件から営農の目標を主畜農業ないし混同農業においたもので、営農面での林野との結びつきは既存の農村地帯よりも一層密接なものが要求される。

われわれはこのような状況のもとにある開拓地農業において現実に林業がいかなる役割を果たしているか、開拓農家の経営と生活面において林業がどのように結びついているかを知らうとする目的をもつて、昭和28年より31年の間に道内6カ所の開拓地の実態調査を実施した。その調査の結果はその都度報告してきたが**これらの調査結果をひとまず

* 「農地開拓の概要」北海道、昭和33年発行

** 加納瓦全、小関隆祺「開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査」(I)-(II)

加納瓦全、小関隆祺、霜鳥茂「開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査」(III)-(V)

北海道大学農学部演習林研究報告第17巻第1号、第2巻、第18巻第1号、第2号、第19巻第1号

総括しようというのがこの報告の目的とするところである。

調査研究をすすめるにあたって、何よりもまず、林業ないし林野が農家経済の安定確立に対してどのように役立つているかを知ることが基本的な立場とした。すなわち、ここでは林業に対して独立の産業としての把握を行わず、むしろ林業は農家経済の一部としてこれに従属するものとしてとらえた。

農家の経済に対して林業が果している役割を検出するために、この研究では次の三つを指標として用いた。(1) 農家経済において林業収支がどのような比重を持ち、かつ貢献しているか。(2) 自家労働力の配分上林業労働のしめる地位はどうか。(3) 農家の生活営農のために林野はどのように利用されているか、すなわち林野はどのように経営の中にくみ入れられているか。

以上の三点に主要な視点をおきながら、これまでの調査結果の総括を行つたのが以下の報告である。ここで注意しなければならないのは、ここに報告されていることがらは、以上のような立場をとりながら、現実をできるだけ忠実に表現しようとした結果であつてこのような状態がそのままの形で希ましいというわけではない。現実を正しく把えることによつて、開拓農家安定のために林業ないし林野の果すべき役割の可能性と限界とを想定し、将来の営農計画にあつて林業との提携をより合理的効果的にするための資料を提供せんとするにはかならない。

最近になつて開拓事業は安定農家の創設を主目的として実施されることとなり、その安定条件の一つとして林業を経営の一部としてますます強くとり入れようとする機運が生じてきているようであるが、このような時にあつて、この調査の意義は決して低いものではないだろう。

I. 調査の方法と調査地の概況

1. 調査地の選定と調査の方法

北海道内の各地に6カ所の調査地を選んだことは後述のとおりである。調査地の選定にあつては北海道内の全域から広く開拓地をひろいあげること留意した。これは地域によつて各種の自然条件や社会経済的条件が異なつているので、なるべくいろいろの条件下の開拓地を調査しようとしたためである。しかし、このことは必ずしも開拓地農業の地域区分、あるいはその類型化を意識して行つたのではない。したがつて、道内に広く分散して選定された調査地はその地域の代表的のものとして選んだわけではない。その理由は開拓地のおかれていいる諸条件はかなり差異があり、その上に行われている開拓農業のタイプはそれに対応して異なつてはいるが、それはその地域の既存農業のタイプの直接の反映だ

けとは考えられないと同時に、開拓地間に既存農業地帯ほどに明確な諸類型を指摘し得ると考えられないからである。

つぎに、この調査目的である林業との関連に着目して、森林地帯ないしはその周辺に展開する開拓地のうちから、何らかの方法で林業との関係が密接であろうと思われるものを選んだ。戦後の北海道の開拓地は河川の上流にさかのぼつて山間あるいは森林地帯に深く入りこむものが多いが、これらはその位置的な関係からいつて、また生計維持および営農の必要上、林業との結びつきが深くなるのは当然といえよう。したがつて、戦後の開拓地は既存農業地帯にくらべて一般的に林業との結びつきが密接となることはいうまでもない。しかし、なかには森林地帯を遠くはなれ、林業と直接の結びつきをもたない開拓地もあるので、これらは調査地として選定しなかつたのである。

以上のほか、調査地選定にあつては、はじめて入植してから数年以上を経過したものをえらんだが、これはある程度開墾と営農の実績があるものの方が調査対象として適当だと考えたからである。また同時に資料の有無、調査実施の便宜をも考慮した。

調査は一般調査と世帯調査に分れるが、一般調査は開拓地のおかれている自然的条件社会経済的条件および営農の概況を知るために行うもので、主として北海道農地開拓部関係諸課、所在町村の役場、開拓農業協同組合などより資料を求めた。

世帯調査は農家経済の内部において農業と林業とがいかなる結合を保っているかを知るために行つたもので、各開拓地において農家の家族数、作付面積、飼育家畜数、営農の成績、入植年次および調査の便宜などの諸点を考慮して10戸内外の農家を選定した。世帯調査は訪問、聴取の方法によつて農業経営、家計などの全般にわたり、調査実施時期に最も近い1年間について行つた。この調査期間の1年間は調査実施時期によつて歴年、会計年度の場合もあるし、最近1年間の場合もあつて調査地によつて一致しない。

なお、この調査において農家の収入支出はすべて現金によるもののみをさし、現物経済の現金換算を行つていない。現金の収支のみが農家経済のすべてではなく、現物経済のしめるウェイトは開拓農家においてもかなり高いので、正確に農家経済の全体を示すには現物経済を無視することは誤りであるが、実際には現物経済を正確に把握することが困難であるばかりでなく、これを経営と家計にきびしく分離することも困難である。これに対し、現在の経済体制においては最も重要なのは現金経済であつて、これによつて農家経済の全般を推測することは可能である。この調査において現金経済によつて農家経済の全体をみようとする理由は以上のとおりであるが、したがつて、たとえば収穫のうちの経営仕向および家計仕向の現物は自家消費分として収入に計上されないが、同時に自家収穫物購入分として支出に計上しないので、全体としては矛盾を生じない。自家労働力についても同様である。

この調査はいわば事例調査であり、各開拓地、各世帯にそれぞれ特殊な事情が存在するので、これによつて一般的普遍的な結論を誘導するにはなお問題があると思うが、事例の積上げとしてある程度の一般化は可能であろう。なお、世帯調査においては農家の記帳は極めて不完全であつて、調査が主として各人の記憶に頼らねばならぬのが実状であつたので、そこにあげられた数字の絶対値は必ずしも不動の確実性を持つものではない。しかし、この点を充分考慮に入れながら傾向的なものの把握を行うことに留意した。

2. 調査地の概況

以上のようにして選定した調査対象開拓地の所在、調査実施状況を簡単に表示すると表1のとおりである。

表1 調査地一覧

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
所 在	川上郡標茶町	上川郡美瑛町	瀬 棚 郡 北 桧 山 町	宗谷郡猿払村	磯谷郡蘭越町	寿都郡三和村
調 査 年 月	28年10月	29年10月	30年7月	30年11月	31年7月	31年10月
入 植 戸 数 (戸)	56	98	56	32	55	25
調 査 戸 数 (戸)	10	11	10	10	12	10
調 査 期 間	27年10月 ~28年9月	28年11月 ~29年10月	29年4月 ~30年3月	29年11月 ~30年10月	30年4月 ~31年3月	31年1月 ~31年12月
備 考	22年4月初入植, 7年目	22年4月初入植, 8年目, この年やや冷 害	21年初入植, 8年目, この 年やや冷害, 15号台風の被 害大	24年初入植, 7年目, 毎年 水害この年水 害最大	20年初入植, 11年目	22年初入植, 10年目この年 冷害

註 1. 入植戸数は調査時の現在戸数 2. 備考の初入植は一部でも入植した年を示す。

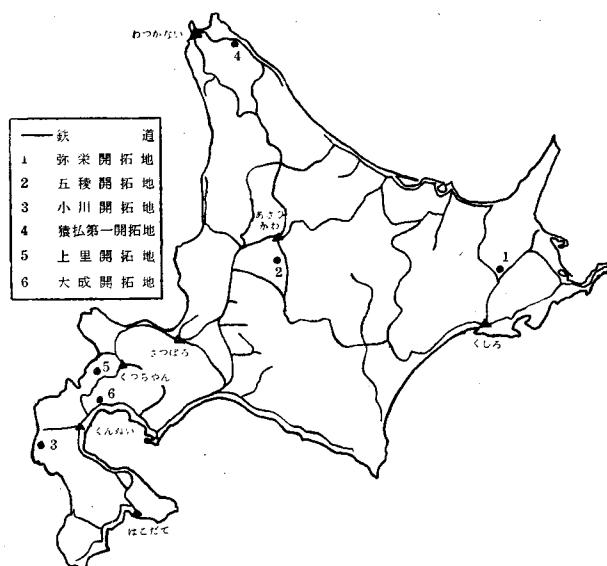
各調査対象開拓地の自然的条件、社会経済的条件および営農概況を簡単に展望すると以下のとおりである。

(1) 彌栄開拓地

彌栄開拓地は北海道の東部、いわゆる根釧原野の内陸部に位置し、国鉄標茶駅の北方約10kmの地点に南北に長くのびた2,350町歩の団地である。団地の中央を北海道費の道道が縦貫しており交通の便が良い。

海拔およそ60~148mの丘陵性波状地帯で、平地または緩傾斜地も少なくない。土壌は摩周岳系の火山灰で、表層は腐植質壤土となつている。地味は根釧原野としては比較的良好である。気候は根釧地帯の類型に属するが、海岸地方よりもはるかに条件は良く、海霧の影響は余り大きくない。無霜期間は110日ぐらいといわれる。

この開拓地はもと陸軍軍馬補充部の用地として軍馬の放牧飼育に使用されていたもの



調査開拓地位置図

であるが、昭和22年をはじめて入植をみ、調査実施時である28年10月には開拓者総数56戸である。その間の離農率は非常に低い。入植者の過半がもと満洲開拓団員で、弥栄開拓地の名称はそれに由来するものである。満洲以来の良き指導者にめぐまれて、開拓意欲がさかんである。

団地面積2,350町歩のうち個人割当地は1,100町歩で、のこりの大部分は共有地(開協所有)となつている。個人配当地は約20町歩で、この中に薪炭用樹林地と採草放牧地を含んでいる。気候、土壌などの自然的条件によつて営農形態は主畜農業が望まれるが、入植当初よりその線にそつて乳牛を中心とする主畜農業を目標として推進されている。

この開拓地を林業との関連においてその特徴とするところをみると、共有地となつた所はもとより、個人配当地にも開拓地上に残存していた樹木が比較的豊富であつたことである。(町当り260石は少なくともあつた)のちに述べるように、この樹木を利用した製炭が、この開拓地の開墾、営農確立の過程において農家の生活をささえた役割は小さくなつた。

(2) 五稜開拓地

五稜開拓地は北海道の中央部を南北に走る中央山脈の西側に位置し、上川盆地の南端が丘陵地に移る地点に展開する面積約900町歩の団地である。国鉄美瑛駅の西方約7kmの地点にあり、駅より開拓地にいたる交通も地区内の交通も戦後の開拓地としては不便な方ではない。

海拔150~200mの丘陵性波状地帯で、一部は350mぐらになつている。土壌は砂

質または礫質壤土が主であつて地味は比較的良いが、場所によつては大形の礫がある。傾斜がかなり急な所も含まれている。気候は上川盆地よりもやや冷涼で、作物の生育期間もやや短いが開拓地一般としてはめぐまれている。この開拓地の一帯はもと御料林であつたが、昭和22年4月樺太よりの引揚者を主体とした14戸の入植をみたのが始まりで、その後連年入植者を増し、調査実施時である昭和29年10月には98戸であつた。その間の離農率は非常に低い。入植者は樺太よりの引揚者が過半をしめている。

個人配当地は28年度以前入植は1戸当り7.6町、29年度入植者は11町である。配当地には薪炭用林地と採草放牧用地を含んでいるが、その面積は少なく、配当地上に残存していた樹木も多くない。この外に樹林地状態の共有地もほとんどない。そのために自家所有の樹木を利用する林業収入はあまり大きい額にはならない。営農の形態は有畜畑作農業を目標としている。なお、調査期間は28年11月より29年10月までの1年間であるが、このうち29年はやや冷害の気味があつたが、その農家経済に対する影響はあまり大きくなかつた。

(3) 小川開拓地

小川開拓地は北海道の南、半島部の日本海沿岸に近い山地に位置し、国鉄東瀬棚駅の南方約14kmの地点に展開する925町歩の団地である。道路は東瀬棚駅より若松市街までの8kmは国道で比較的良く整備されているが、若松より開拓地までの6kmは開拓道路でありその状態は余り良好でない。

海拔およそ150~330mの波状丘陵地帯であるが西南部は高台状をなしている。沢沿いにはかなりの急傾斜地がある。土壌は火山灰性埴壤土ないし壤土であるが、腐植質が比較的多く土性は悪くない。気候は日本海暖流の影響を受けて比較的温暖である。無霜日数は約140日である。

この開拓地はもと大部分が民有地で、一部は国有林であつた。民有地は明治末年から入植が行われ大正の中期には戸数90に達したほどであつたが、交通その他の条件によつてほとんどの農家が脱落離農し、跡地は一部にカラマツの造林が行われたほか、他の大部分は荒廃したまま放置されていたものである。それが、戦後の昭和21年になつて再び開拓地として利用されることになつたのである。昭和21年7戸の入植をもつて始まり、その後年々入植者は増加したが、離農者もあいついで生じ、結局調査時の30年7月には56戸が定着していた。入植者の大部分が香川県、長野県などの内地府県出身者である。

団地面積925町歩余のうち、189町歩は土砂扞止林、36町歩余は共同薪炭用地ないし共同採草地であるが、他は個人に配当され、その面積は平均9.8町歩であるが入植者個々によつて面積にかなりの開きがある。農業経営の形態は酪農を主体とし大小豆、馬鈴薯などを配した混同農業を目標としている。

開拓地の地区には上記の土砂扨止林と共同薪炭林のほかに、個人配当の薪炭林も存在するが、その現在の林相はきわめて貧弱である。地区内には19基の炭窯があるが、配当地内で開墾の過程より生ずる材料と、国有林より払下げを受けた材料によつて製炭が行われている。

調査期間の昭和29年度は冷害であつた上に9月の15号颱風の被害をうけて、その菅農の成績はきわめて悪く、耕種収入が非常に少なかつた。そのために製炭や林業賃労働の収入に依存する割合が多くなつている。冷害と颱風の影響は深刻で、一部に生活扶助を受ける農家も出現した。

(4) 猿払第一開拓地

猿払第一開拓地は北海道の最北端部の宗谷岬からほど遠からぬ地点、国鉄鬼志別駅の南方約4kmのところにある。オホツク海に流れ入るエコペナイ川の兩岸に沿うて東西に長く展開する1,084町歩の団地である。

地区の中央を流れるエコペナイ川はゆるやかに蛇行してオホツク海に入っているが、開拓地はこの兩岸の平坦地とこれに続く背後の丘陵地帯よりなつている。海拔高は8~110mである。土壌は川沿いの部分の沖積地帯に埴土が分布して肥沃であるが、その面積は広くない。その他の地帯はおおむね重粘土で排水が悪い。エコペナイ川は傾斜がゆるやかで落差が少ない上に蛇行しているので、しばしば洪水を起す。気候は北海道の北端部に近くオホツク海に面しているので、冷涼である。

土地の沿革をみると、一部は大正時代に一時開墾されその後放棄された部分があるが、戦後の開拓前は大部分は王子製紙株式会社の所有林、一部は三井木材株式会社の所有林と国有林であつた。昭和23年に樺太からの引揚者10数戸が仮入植したのが戦後開拓のはじまりである。調査実施時の昭和30年11月には32戸が現存しているが、その間に11戸の脱落離農がみられた。

団地面積1,084町歩であるが、このうち、個人割当地は1戸当り約15町歩である。主畜農業を目標としている。(この開拓地は猿払第一地区と豊里地区に分れているが、このうち豊里地区の地区計画が未確定でその内わけの数字が明らかでない。猿払第一地区のみについてみると、1戸当り平均14.5町歩で、このうち4.5町歩が薪炭林用地となつている。)個人配当地のほかに土砂扨止林、防風林、共同薪炭林が猿払第一地区のみで104町歩の面積をしめている。なお地区内に炭窯が4基ある。樹木には比較的めぐまれているといえる。

この開拓地において最も特徴的なことは、エコペナイ川が前記のような地形や土壌の性質によつてきわめてかんたんに氾濫することである。とくに調査期間の30年度にはしばしば大洪水に見舞われて、ほとんどの作物に甚大な被害をこうむり、農家経済に対してほとんど決定的な影響をおよぼした。これに対し河川の改修はほとんど申し訳程度にしか

行われていない。鬼志別駅よりわずか4 kmの地点にあつて距離は短かいが、前記の出水による道路損傷がしばしばくり返される。

(5) 上里開拓地

上里開拓地は北海道の本島の部分が半島部に移行する途中、日本海側に近いニセコ山塊の南麓に展開する面積約730町歩の開拓地で、一大団地と三小飛地よりなつている。国鉄蘭越駅の北西約10 kmのところにある。駅から開拓地までの道路の状態は特別に悪いということはなく道内一般の町村道の程度である。

海拔240~300 mくらいで、南北に山岳地帯をひかえて、波状丘陵ないし段丘地帯をなしている。土壌は埴壤土ないし埴土であつて粘着力が強い。東半部の高台では水を得られない。また、河流の両岸は礫が非常に多く、場所によつては開墾が困難である。気候は比較的温和で無霜期間は160日くらいである。

この開拓地の一部には明治の末期に入植をみ、第一次世界大戦後に農業の不況によつて放棄された部分がある。戦後の開拓前はすべて民有地でそのうちに小樽市有林が比較的大面積をしめていた。昭和20年に隣接の吉国に入植した8戸のうち2戸が、この地区に横すべり入植をしたのが戦後開拓のはじまりである。その後、毎年数戸ないし10数戸の入植があり、その間に14戸の脱落離農をみたが調査実施時の31年7月には55戸となつている。現入植者のうち樺太引揚者と地元出身者のしめる割合が大きい。

団地面積729町歩のうち個人配当地は589町歩である。これは1戸当り平均10.6町となつているが、この中には薪炭林などの附帯地が平均2.3町歩含まれている。また個人配当地のほかに99町歩の共有地があるが、そのうち64町歩が薪炭備林および防風林地とされている。これらの土地上の林相はきわめて貧弱である。地区内に炭窯が5基ある。

営農の目標は混同農業におかれ、大小豆、馬鈴薯、飼糧作物などが主として耕作されている。水稻が小面積であるが、河の両岸に耕作されている。なお、東半部の高台では水を得られないので、17戸が河川流域に密居住宅をかまえ通い作を行つている。

(6) 大成開拓地

大成開拓地は北海道の南部、半島部のほぼ中央に位する黒松内低地帯の東端に展開する。約542町歩の団地である。国鉄黒松内駅の東方20 kmのところであり、黒松内駅よりここに至る道路は内浦湾沿岸の静狩に通ずる国道で、これが開拓地の中央を東西に貫通している。静狩までは本開拓地の最南部より4 kmにすぎない。黒松内駅から遠い割合には交通の便が悪くはない。

海拔は約140 mで、地区の中央は平坦ないし低台地をなし、周辺は丘陵地帯となつている。土壌は火山灰性埴土で腐植性粘土を混じている。礫がいたる所にあり、局所的には甚だ多量である。地味は著しく悪いというわけではない。気候は夏冷冬温の地帯といわれ

6~7月には南方の内浦湾からふきこむ海風によつて濃霧を生じ気温が低下する。融雪も比較的小おそく、無霜期間も短かく、気候的にはめぐまれない。

この地区はすでに明治43年に区割が行われ入植者があり、農業が行われたことがあるが、これは気候条件などによつて余り振わず、昭和のはじめころにはほとんど放棄されてしまったという沿革をもっている。その土地が戦後に再び入植をみたのは昭和22年のことである。したがつて、土地は大部分が民有地で一部に国有未開地があつた。ほとんどが広葉樹の二次林であつた。調査時の31年10月には25戸であるが、その間の離農者は1戸にすぎない。入植者は樺太出身者が大半である。団地面積542町歩のうち450町が個人に配当され、共有地(開協)53町歩となつている。

個人配当は1戸当り平均18町であるが、土地の状況により1戸ごとにみると面積にひらきがかなりある。このなかには薪炭林と放牧地が含まれている。

営農の目標は混同農業とされ、馬鈴薯、燕麦などを主作物としているが、水稻が一部に耕作されている。調査年の31年は冷害であつた。周囲は道有林に囲まれ、地区内に造材飯場が設けられている。

調査地全般について、その位置が山麓ないし山間地帯にあること、その自然的条件が既存農業地帯に比して悪いこと、交通の条件も同様であることなどが指摘される。営農の形態は主畜農業ないし混同農業を目標としていることは各開拓地とも共通であるが、上里大成開拓地には水田もある。

開拓地上に残存していた立木については、弥栄開拓地では極めて多かつたが、他の開拓地では極めて少ないのが通例であり、共有地または個人配当地上に予定されている薪炭備林地の現状も立木蓄積は少ない。しかし開墾の過程から生ずる樹木は自家用薪ないし製炭用としてかなり役立ちうるし、現実に役に立っていると見えよう。また、隣接地またはあまり遠くない所に国有林、道有林などの森林地帯があつて賃労働の機会が比較的容易に得られる状態にあることはほぼ各開拓地に共通である。

戦後の開拓による入植前にすでに曾て一度入植開拓されそれがのちに放棄され、再び開拓地になつたところが、小川、上里、大成の三開拓地、猿払第一の一部にあるのが注目される。

各開拓地のおかれている諸条件と入植の概況は以上のごとくであるが、調査時点までにすでに7~11年を経過しており、困難な条件のなかで開墾をはじめとして営農基盤の整備確立をすすめてつある。調査時における開墾、作付の状況、生産手段所有状況および貯蓄負債の状況をみると表2のとおりである。

各地の開墾の進展状況、生産手段の蓄積状況および貯蓄負債の状況は必ずしも一様で

表 2 開拓進展状況 (調査農家 1 戸当り)

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
配当地面積 (町)	20.3	8.2	10.7	14.7	11.4	18.0
開墾面積 (町)	5.5	6.3	4.9	6.9	4.1	6.3
耕作面積 (町)	4.5	5.8	4.0	6.2	3.3	4.2
家畜						
馬 (頭)	2.2	1	1.1	1.1	1.4	1.2
牛 (頭)	2.1	0.5	1.5	1.4	0.2	1.2
大農具 所有状況						
プラオ	1.4	1.2	1.1	1.1	1.2	1.2
ハロー	1.1	1.1	0.9	0.9	1.1	1.1
カルチベーター	0.6	0.6	0.6	0.2	0.6	0.8
噴霧器, 撒粉器	0.8	0.8	0.8	0.7	0.6	0.6
トミ	0.6	0.7	0.8	0.6	0.5	0.5
脱穀機	0.7	0.3	0.6	0.7	0.4	0.4
馬車	1.0	0.9	0.5	0.5	0.5	0.6
貯蓄 (円)	37,700	36,100	41,430	8,150	9,470	23,740
負債 (円)	114,100	112,600	254,310	183,870	181,980	222,420

註 1. 家畜は仔の数を含む 2. 大農具は共有を含まない 3. 貯蓄は預金, 株券, 出資金等を含む 4. 負債は個人よりの借金, 政府資金などすべてを含む 5. 上里の作付面積には配当地のほか自己所有地, 借用地が若干含まれている。

はないが, 年数の経過の割合には開墾面積は大きくないようである。生産手段の蓄積も充分とはいえず, 多額の負債 (その大部分は政府資金) を残しているのが一般的である。

各地の状況を見ると, 以下のとおりである。

弥栄開拓地は全戸 7 年目にあたる。配当面積は比較的大きいが, 開墾, 耕作面積はその割合に少ない。家畜および農具の蓄積は比較的順調にすすめられているといつて良い。

1,141 百円におよぶ負債がある。

五稜開拓地は入植後 5~8 年を経過した農家の平均である。配当地が極めて少ない割合に開墾は進展している。生産手段のうち家畜の蓄積が比較的少ない。負債は 1,126 百円に達する。

小川開拓地は入植後 4~8 年を経過した農家の平均である。配当地面積も比較的小さいが, 開墾面積, 耕作面積もあまり大きくない。生産手段の蓄積は各調査地の中で普通であるが, 負債は最も多く 1 戸当り 2,554 百円に達する。

猿払第一開拓地は 5~7 年を経過した農家の平均であるが, 経過年数の割合に開墾, 耕作面積は小さくない。生産手段蓄積は普通より幾分低目である。負債は 1,838 百円で比較的多い。

上里開拓地は 5~10 年を経過した農家の平均であるが, 開墾, 耕作面積は少なく, 生

産手段の蓄積も小さいようである。負債は1,820百円に達する。

大成開拓地は8~10年間の農家の平均であるが、開墾面積の割合に耕作面積が小さく、不作付地の多いことを示している。生産手段の蓄積状況は普通であるが2,224百円の負債がある。

II. 農家経済における林業の貢献

ここにいう農家経済とは、開拓農家における農業経営と家計の両方を含めたものをさしている。調査の方法の項で述べたように、一般に農家経済において経営と家計をきびしく分離してとらえることは極めて困難なので、その両方を含めて農家経済全体としてとらえることとしたのである。しかも現物経済はこれを経営と家計の相互の間で交流相殺されるものと仮定し、農家経済を現金経済のみによつてみようとしたことも前述のとおりである。げん密にいうならばこのようにして調査した結果は、そのままでは農家経済における林業の相対的な高さを示すものとはいえないことは勿論であるが、現在の経済体制下における現金経済の重要性にかんがみ、また調査方法の制約などの点を考慮して現金経済のみによつて農家経済の全般とその中における林業の地位を表現しようとしたのである。

また、この現金経済の中には現金収入支出の全部がのこらず含まれている。したがって、たとえば支出の中には資本的支出も損費の支出も全部が含まれ、また臨時的支出も含まれている。収入の中には財産の売却も含まれる。そのため、収支を対照してその差額を求めても必ずしも経営計算的な収支とはならない。単純に収入の全部と支出の全部を対比して、一年間の農家経済のスケールの大きさとその中における林業の地位を示そうとしたにはかならない。

このようにして調査した開拓農家の現金経済と、その中における林業の地位をみると以下のとおりである。

1. 農家現金収入と林業収入

農家現金収入を農業収入と林業収入とその他の収入の三者に分けて、農家1戸当りの平均額とその比率を示すと表3のとおりである。

ここで農業収入とは耕種、家畜、農業賃労働および農業雑の各収入の合計である。林業収入は薪木炭などの販売収入と林業賃労働収入の合計である。また、その他の収入には上記以外の賃労働、補助金、特殊職業、臨時収入などのすべてが含まれている。

まず、収入の合計についてみると、最低が小川開拓地の1,332百円、最高が五稜開拓地の3,535百円である。現物経済を含まないものではあるが、開拓農家経済のスケールがあまり大きなものでないことがわかる。農業収入もまた一般に少ないが、とくに冷害や水

表3 農家現金収入 (1戸当り)

(単位円)

開拓地名	弥栄	五稜	小川	猿払第一	上里	大成
農業収入	855	2,799	584	556	1,090	559
林業収入	1,191	340	325	930	257	658
その他収入	400	396	423	756	186	344
合計	2,446	3,535	1,332	2,242	1,533	1,561
同 上 比 率 (%)						
農業収入	35	79	44	25	71	36
林業収入	49	10	24	41	17	42
その他収入	16	11	32	34	12	22
合計	100	100	100	100	100	100

註 1. すべて調査対象農家の平均である。以下の諸表においても同様である 2. 上里は調査農家数12戸であるが、平均は特殊な事情のある2戸を除き10戸について求めた。以下の諸表において平均を求めたものはすべて同様である。

害の影響の著しかつた小川、猿払第一、大成の各開拓地は1戸当り6万円に満たない。

林業収入は最低が上里開拓地の257百円、最高が弥栄開拓地の1,191百円であるが、全体的にみて農業収入の少なかつた開拓地においてその金額が多くなる傾向がある。これを比率によつてみると全収入のうちで、10%ないし49%をしめているが、農業収入よりも林業収入が多いのは弥栄、猿払第一および大成の開拓地である。

その他の収入は11%ないし34%の範囲にあつて、このウエイトも無視できない大きさになつてはいるが、林業収入よりも比率の高いのは小川、五稜の両開拓地のみで、このうち五稜開拓地はほぼ同比率とみて良いので、全体としては林業比率の方がその他の収入より高くなつてはいる。

このように、現金収入面での林業収入はかなりのウエイトを持つており、とくに冷害などの事情によつて農業収入の少ない開拓地において、とくに大きい比率を示していることが明らかである。

いま、各開拓地ごとにその状況をみると次のごとくである。

弥栄開拓地

弥栄開拓地の林業収入は平均1戸当り1,191百円で、全収入に対して49%となりかなり高く、農業収入を相当引離しているが、これを農家ごとにみると、28%ないし80%の間に分布しており、全戸が林業収入を得ている。金額では620百円ないし2,170百円となつてはいる。弥栄開拓地においてはこの年は冷害の影響はほとんどなかつたが、このように多額の林業収入を示した原因は、開拓地に共通な農業外現金収入への要求度の強さと同時に、前述のような開拓地上の豊富な樹木に由来すること大である。

五稜開拓地

五稜開拓地は平均1戸当り340百円の林業収入で、その全収入に対する比率は10%で、各調査地の中で比率は最も低い、しかし金額では最も低いわけではない。各農家ごとにみると、11戸中1戸に林業収入がないのみで他はすべてあり、80百円ないし1,116百円、4ないし33%の間に分布している。五稜開拓地は各調査地の中で農業収入が最も高い比率を示している。(79%)

小川開拓地

小川開拓地は平均1戸当り325百円、全収入に対し24%の林業収入となつているが、各農家毎にみると林業収入の全くないのは10戸中1戸である。1戸当り30百円ないし722百円、3ないし70%である。この年、小川開拓地では冷害と15号台風の影響で農業収入とくに耕種収入が非常に少なくなつている。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地の林業収入は1戸当り930百円、全収入に対し41%で農業収入よりも高くなつている。ここも冷水害により農業収入が非常に少ない数字を示している。各農家ごとにみると林業収入が全くないのは全然なく、各戸にそれがあつて、なかには金額も比率もかなり高い農家がある。すなわち、106百円ないし1,730百円、7ないし87%となつている。

上里開拓地

上里開拓地は1戸当り257百円、全収入に対し17%の林業収入で、各調査地の中では金額で最も低く、比率では五稜開拓地のつぎに低い。各農家ごとにみると、林業収入が全くないのは12戸中4戸あり、その他の農家では1戸当り155百円ないし800百円、5ないし47%となつている。上里開拓地はこの年農業収入が五稜開拓地について多く、1戸当り1,090百円、71%である。

大成開拓地

大成開拓地では林業収入が1戸当り658百円、全収入に対し42%で、農業収入よりも多くなつている。農家ごとにみると、林業収入の全くない農家はない。1戸当り50百円ないし1,200百円、4~71%の間に分布する。大成開拓地はこの年冷害の影響が著しく農業収入が1戸当り559百円にすぎなかつた。

以上のように開拓地ごとに検討してみると、林業収入のウェイトが高いのは農業収入の低さと関連していることが知られる。これは農家毎にみても同様であつて、営農条件の未確立、冷害などによつて農業収入の得られなかつた農家に林業収入が多い傾向が明瞭である。農業外収入の必要性が林業収入実現の可能性と結びついたものという事ができよう。

表 4 林業収入比率別戸数 (単位 戸)

開拓地名	弥栄	五稜	小川	猿払第一	上里	大成
平均林業収入比率 (%)	49	10	24	41	17	42
0	—	1	1	—	4	—
~10 %	—	7	2	1	2	1
~20	—	2	1	—	1	—
~30	1	—	1	2	3	2
~40	1	1	2	4	—	1
~50	4	—	2	1	2	3
~60	2	—	—	—	—	2
~70	1	—	1	—	—	1
~80	1	—	—	—	—	—
~90	—	—	—	2	—	—
計	10	11	10	10	12	10

註 0 は林業収入が全くないことを示す。

開拓地農家においては林業収入のしめるウエイトがかなり高く、とくに冷水害などの被害の大きい開拓地において著しいことは、一般的にみとめられたわけであるが、同時に農家を単位としてみた時に、林業収入のウエイトのばらつきが極めて大きいことが、一つの特徴として指摘できる。これは上の叙述によつても知られるが、比率のばらつきを集計してみると表 4 のごとくである。

表 4 によると、ばらつきの中心は平均の比率の低い開拓地において低く、高い開拓地において高くあらわれる傾向を示しているが、ばらつきの範囲はかなり広いことが指摘されよう。

なお、入植年度と林業賃収入比率の高さとは、開拓地ごとにみても、各地内の農家ごとにみても一定の傾向がみられない。すなわち、入植年度が古い農家や開拓地において、林業収入の比率が低くなる（古いとそれだけ営農条件が安定するという予想からいう）ということもいえないし、その逆のことも一般的な傾向としては指摘できない。

2. 林業収入の内容

林業収入は大別して二つに分れる。すなわち薪、木炭などの販売代金と林業賃労働による賃銀収入である。

薪、木炭などの販売代金は自家において生産した林産物を売払つたものであるが、これは農家における林業経営といつても良いが、その経営の内容は単に開墾の過程から生ずる伐採木や自家の配当地内の残存樹木を利用した生産物販売であつて、必ずしも組織的計

面的なものではなく、むしろ開拓の過程における臨時的性格の強いものである。すなわち一方では営農未確定による農業外収入の必要性和、一方では残存樹木の存在とが結びつけられたものとみることができよう。一部には立木を買入れて生産を行つている例もある。いずれにしろ、育成過程を経過した農家林業収入でない。

林業賃労働による賃銀収入は、開拓地が大ていは林業地帯に接続して存在するという事情からいつて、就労する場所が容易に提供されているといつて良い。この仕事に従事する動機は前の場合と同様である。

自家生産物の販売の場合もその生産にさいし、労働力を雇傭することはほとんどなく、自家労働力によつて行われるので、自家労働力の消化という点では賃労働に従事すると全く同様に考えてよいだろう。

林業収入の額とその全収入に対する比率が、開拓地によつてあるいは農家によつて著しい差があることは前述のとおりであるが、林業収入の内容もまた開拓地あるいは農家の個々の条件によつて著しく差がある。すなわち、ある開拓地では林産物販売収入が多く、他のところでは賃労働が主体になつており、また、農家によつても異なる。

林業収入を薪、木炭などの販売収入と林業賃労働収入とに大別して、開拓地ごとに1戸当り平均収入を示すと表5のとおりである。

表5 林業収入の内容 (1戸当り)

(単位 100円)

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
薪、木炭など販売	1,071	187	163.5	298.3	60.5	51.0
林業賃労働	120	153	162.6	631.5	196.3	606.6
計	1,191	340	325.1	929.8	256.8	657.6

表5によると薪、木炭などの林産物収入の多いのは弥栄開拓地において最も著しい。五稜開拓地も賃労働収入より林産物収入が幾分大きめにでている。賃労働収入の方がはるかに多いのは猿払第一、上里、大成の三開拓地で、小川のみが両者の収入がほぼ等しい比率となつている。

いま、開拓地ごとに林業収入の内容をさらにくわしくみると以下のとおりである。

弥栄開拓地

弥栄開拓地では林産物販売代金の中には薪、木炭のほかに用材の販売が含まれる。10戸の平均では用材185百円、薪販売95百円、木炭販売791百円となつている。木炭が最も多く74%をしめている。このように非常に林産物収入の多いのは配当地内に樹木が恵まれていたためにほかならない。これらの原料となつた樹木はすべて配当地内に残存して

いたもの、および開墾の過程において伐採されたものである。林産物収入は全戸にあるがとくに木炭は最も広く行われ、木炭販売収入のないのは10戸中1戸にすぎない。これに対し賃労働に対する就労はきわめて少なく、林業賃収入平均は120百円にすぎない。これも2戸が冬季の賃労働に従事したものである。

五稜開拓地

五稜開拓地の林産物販売収入は大部分は薪の販売にもとづくもので、木炭がこれに加わる。林業賃労働の種類は伐採労働である。林産物販売収入のあつたのは11戸中8戸、賃労働収入のあつたのは同じく11戸中6戸である。また、その両方のあつたのは4戸である。

小川開拓地

小川開拓地の林産物販売は木炭と薪によるもので、原料の樹木は自家の配当地内のものである。林業のため労働力を雇傭したものが1戸ある。賃労働は伐採労働が主である。林産物収入のある農家は10戸中4戸、賃労働収入は6戸、その両方があるのは1戸である。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地の林産物は薪と木炭が主であるが、そのほかに坑木などの素材も含まれている。賃労働は伐採労働である。林産物収入のある農家は10戸中6戸、(このうち3戸は立木を買入れている)。賃労働収入のあるものは全戸、両方あるのは6戸である。

上里開拓地

上里開拓地の林産物販売は木炭と薪である。賃労働は伐採労働であるが出稼が多い。林産物収入があるのは12戸中5戸、賃労働収入は7戸、その両方は4戸である。

大成開拓地

大成開拓地の林産物販売は薪が主で木炭がこれについて少量ある。賃労働は伐採労働で一部に造林労働がある。林産物収入のあるのは10戸中4戸、賃労働収入は9戸、その両方あるのは3戸である。

開拓地ごとに林業収入の内容を概観してみたのであるが、これを表にまとめてみると次のとおりである。

表5にしめした林業収入の内容において1戸当り平均林産物収入の多い開拓地では林産物収入のある農家数の割合が多く、同時に賃労働収入の平均の多い開拓地では賃労働収入のある農家の割合が多いことが知られる。

林業収入といつても開拓地によりあるいは農家により、その内容が異なっていることは上に述べたところで明らかであろう。その内容は薪、木炭などの販売収入と林業賃労働収入に二大別されることもさきに述べたとおりである。薪、木炭など販売収入は大ていは

自家労働力の消化によつて自家の配当地内の樹木を対象にして得られているが、小川開拓

表6 林業収入内容別戸数

(単位 戸)

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
林業収入なし	—	1	3	—	4	—
林産物販売収入のみ	8	4	1	—	1	1
林産物収入と林業賃労働収入の両方あるもの	2	4	5	6	4	3
賃労働収入のみ	—	2	10	4	3	6
計	10	11	1	10	12	10

地において1戸がそのための労働力を雇傭しており、五稜開拓地と猿払第一開拓地では立木の購入を行つたもの、それぞれ1戸と3戸がみられた。その数量は大きくない。

林業収入の内容によつて開拓地の農家経済と林業との関連を類型化すると、第一に弥栄開拓地のように特殊なめぐまれた条件によつて、林産物販売収入の多い開拓地、第二に猿払第一、上里、大成の三開拓地のように林業賃労働収入の多いもの、第三に五稜、小川両開拓地のように前二者の中間的なものとがあげられるだろう。

一般的にいつて弥栄開拓地のような条件は特別なものと考えられるので、第二、第三の類型が多いのではないかと、そして同時に賃労働収入による農家経済に対する貢献の方が相対的に大きいのではないかと考えられる。

3. 農家現金支出と林業支出

農家現金支出を農業支出と林業支出と家計費その他の支出の三者に分けて農家1戸当りの平均額と、その比率を示すと次のとおりである。

表7 農家現金支出 (1戸当り)

(単位 100円)

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
農業支出	847	1,164	773	985	662	655
林業支出	159	13	27	71	3	23
家計費その他	1,442	2,004	1,141	2,161	969	1,559
計	2,448	3,181	1,941	3,217	1,734	2,237
同 上 比 率						%
農業支出	35	37	40	31	44	36
林業支出	6	0	1	2	0	1
生計費その他	59	63	59	67	56	63
計	100	100	100	100	100	100

農業支出とは施設費、耕種および家畜支出の合計であり、林業支出とは林産物取得ならびに林業賃労働就労のための支出の合計である。生計費その他は生計費のほか租税、臨時費などのすべての支出の合計である。

まず、農家支出の合計についてみると、1戸当り最低が上里開拓地の1,734百円、最高が猿払第一開拓地の3,217百円となっており、表2に示した収入と比較してみると、必ずしも収入に対応した大きさを示していない。この点についてはのちに収支差額を論ずるさいにふれるが、それはともかくとして、支出面からみた農家経済のスケールの大きさもあまり大きくない。五稜開拓地は収入よりも小さく、弥栄開拓地はほぼ同じであるが、他の開拓地は収入よりも支出がかなり大きいスケールを示している。結局、開拓地間における農家経済スケールのちがいは支出面からみると縮小されていることが知られる。

農業支出は金額で662百円から1,164百円の間で、比率でみると31%と44%の間にある。生計費その他が969百円より2,161百円の間であり、比率では56~63%の間に分布して第1位をしめている。

林業支出は最低が上里開拓地の3百円で最高が弥栄開拓地の159百円、比率でみると0~6%までである。最高でも弥栄開拓地の6%であつて農家の支出面で林業支出のしめるウエイトは小さいといふことができる。林業収入のしめる比率の高かつた開拓地が、支出面でもやや高い比率を示しているが、農家経済全体からみて問題とするほどの大きさではない。

いま、各開拓地ごとにその状況をみると次のごとくである。

彌栄開拓地

彌栄開拓地の林業支出は1戸当り、平均159百円で全支出に対し6%であり、各開拓地中で最高となつている。これを農家ごとにみると1戸は全然なく、その他では全支出に対して4~20%の間に分布している。金額でみると90ないし420百円である。林業支出の大部分は木炭の包装費で製炭の原木代、築窯費などは過年度にすでに支出されていてここに計上されていない。彌栄開拓地において林業収入の過半は木炭によるものであることはすでにのべたとおりである。

五稜開拓地

五稜開拓地の林業支出は1戸当り13百円で比率は1%にみたない。林業支出のあつたのは11戸中2戸でその全支出に対する比率は2%と1%である。内容は木炭包装費と立木代金となつている。

小川開拓地

小川開拓地の林業支出は1戸当り27百円、比率では1%にすぎない。林業支出のあつたのは10戸中3戸で、その金額は60~125百円で、比率は3~5%である。その支出の

内容は販売費と雇傭労働力の賃金が主なものである。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地の林業支出は1戸当り71百円、比率では2%である。ここでは林業支出は10戸中8戸にあり、金額では8~329百円、比率では0~10%の間に分布している。林業支出の内容は立木代金、販売費および器具費である。

上里開拓地

上里開拓地の林業支出は1戸当り3百円、比率は0.2%ぐらいで各開拓地中で最低である。林業支出は12戸中3戸にあり、その金額は8~160百円、比率は1~3%である。(このうち160百円、3%の林業支出を示している農家は特別の事情にあるので、上の平均の計算には除外している。)内容は販売費の包装費などと製炭費である。

大成開拓地

大成開拓地の林業支出は1戸当り23百円で比率では1%である。林業支出は10戸中4戸にあり、金額で4~100百円、比率では0~4%の間に分布している。支出の内容は器具費と包装費である。

以上を総括していうと、林業支出は農家支出のなかで大きなウェイトをしめるものではないということになる。収入面での林業収入のウェイトの大きさに思いくらべてみるとその低さは意外である。これは林業賃労働はもとより自家の林産物生産も、大ていは自家の労働力を消化することによつて行われ、それが収入として現金になつくるが、それに対応する支出が、現金支出で行われることがほとんどないからである。賃労働就労のさいは勿論であるが、自家生産で行う場合も労働力を雇傭したり、立木を買入れたりすることが非常に少ないことは先に述べたとおりであつて、これが収入の割合に支出をすくなくしている原因である。同時にこの林業支出は経営計算的にいつて、林業収入に対応する経費というわけにはいかないことにも注意する必要がある。立木代、築窯費、道具代など過年度に支出された経費はこの調査の数字にはあらわれていない。つまり、調査の立前が現金の出入の記録であつて、資本的支出も損費的支出も、また財産売却の収入も区別して取扱わず全体としての農家経済のスケールの大きさと、その中での林業のウェイトを知ることが目的としているからである。したがつて、立木代、道具費などが過年度に支出されていると、この年の支出として計上されず、それだけ支出が経営計算的支出よりも少なくなるわけである。

林業支出のしめるウェイトは以上のようにして、非常に小さく表現されているが、しかし、その中でも林業収入の比率の高い開拓地の林業支出、比率は相対的に高くなつていくようである。

農家を単位にとつてみても開拓地単位にみた場合と同様、林業支出のウエイトの小さいこと、その中で収入の多い農家では支出の比率も相対的に高いことが知られる。農家間の林業支出、比率のばらつきは収入の場合ほど著しくないが、一部の農家では全支出の20%をしめるものもある。

4. 農家経済収支とこれに対する林業収支の影響

以上に述べてきた農家経済の収入と支出を対照し、その差額をみると表8の如くである。

表8 農家現金収支 (1戸当り) (単位100円)

開拓地名	弥栄	五稜	小川	猿払第一	上里	大成
収支差額	-2	354	-609	-975	-201	-676

この収入支出は現金収支のみであつて、現物の収支を含まないが、現物の経済が農家の経営と家計の内部においてたがいに相殺されると仮定すると、ここにあらわれた差額は結局は農家経済全体の収支決算と等しいと考えることが許されよう。ただし、調査年1年間限りの単純な収入支出の対照であることはすでにしばしばことわつたとおりである。

収支決算において黒字を示したのは五稜開拓地のみである。弥栄は収支ほぼ相つぐなつていてと考えてよいから、他の4開拓地が赤字となつている。とくに冷水害の被害をうけた小川、猿払第一および大成開拓地の赤字額はかなり大きい。このことはすでに述べた現金経済における支出のスケールが、弥栄、五稜以外の開拓地において収入よりもかなり大きかつたことによつても想像されたところである。

いま、各開拓地ごとの状況をみると以下の如くである。

彌栄開拓地

彌栄開拓地では平均して1戸あたり2百円の赤字であるが、これは収支ほぼ相つぐなつたと考えて良いだろう。農家ごとにみると、黒字は10戸中6戸で、その金額は67百円ないし1,326百円、赤字は4戸で241百円ないし1,347百円となつており、農家間の差がきわめて大きい。農業収入と農業支出のみの対照で赤字となつている農家が3戸存在する。

五稜開拓地

五稜開拓地は平均して1戸当り354百円の黒字を示している。農家ごとにみると黒字は11戸中7戸で、その額は56百円から1,212百円の間分布し、赤字農家は4戸でその赤字額は215百円から911百円の間である。平均で見るとかなりの黒字であるが、個々の農家間では著しい差異がある。この五稜開拓地は農業収入が他ときわだつて多いために、農業のみの収支をみると赤字農家はない。

小川開拓地

小川開拓地は平均して1戸当り609百円の赤字であるが、農家ごとにみると10戸中1戸が72百円の黒字となつているほかは残りの9戸が全部赤字である。その金額は最低195百円、最高1,363百円である。農業の収入が著しく少なかったため農業だけの収支でも平均で182百円の赤字となつている。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地は平均して1戸当り975百円の赤字で、各調査地間で最高となつている。農家ごとにみると10戸中1戸がわずか10百円の黒字を示すほか、残りの9戸は最低418百円、最高1,986百円で最もはげしい赤字の状態を現出している。農業のみの収支をみても平均429百円の赤字であり、農業収支の黒字農家は2戸のみである。

上里開拓地

上里開拓地は12戸のうち10戸の平均で1戸当り201百円の赤字であるが、調査世帯12戸についてみると黒字は3戸でその額74百円ないし698百円の間である。他の9戸は赤字で、その額は最低51百円、最高793百円である。農業収支のみで赤字のものは3戸ある。

大成開拓地

大成開拓地は平均して1戸当り676百円の赤字であるが、農家ごとにみると10戸中1戸が491百円の黒字で、他の9戸は赤字である。赤字の額は最低15百円、最高1,799百円で、猿払第一につぐはげしい赤字となつている。ここでも農業収入が著しく少ないため、農業収支のみで平均96百円の赤字で、10戸中7戸が赤字となつている。

以上の如く、農家の現金収支の差額を検討してみると開拓地間によつて、著しい差があるばかりでなく、これを農家間によつてみるとよりはげしい差があることが知られる。最高は20万円に近い赤字農家が存在しており、農業収支だけをみても赤字になった開拓地、農家があることが指摘された。これらの赤字の最大の原因は農業収入の過少にあることは明瞭である。

いま、林業の収支を除いた他の収入支出を対照して差額を示すと、表9のとおりである。これは林業の収入支出がないものとする農家経済の収支が、どのように変化するかをみようとするもので、表2の農家収入から林業収入を除いたものと表6の農家支出から林業支出を除いたものを対照した結果である。

林業収支がないものとする農家経済の収支決算額は、五稜開拓地のみが27百円の黒字であるが、他はすべて多額の赤字になる。表9を表8に対比してみると林業収支が加わることによつて黒字額を増加し、赤字を解消し、または赤字額を減少することが明らか

表 9 林業収支を除いた農家現金収支 (1戸当り) (単位 100 円)

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
収 支 差 額	-1,034	27	-887	-1,834	-355	-1,311

である。

いま、各開拓地ごとにこの関係を見ると以下の如くである。

彌栄開拓地

彌栄開拓地では林業収支がないとすると、1戸当り1,034 百円という多額の赤字となるが、林業収支を加えることによつて平均2 百円の赤字となり、ほぼ収支相つぐなう状態になる。農家ごとにみると、林業収支のないときは10 戸全部が赤字であるが、これに加えることによつて赤字農家は4 戸に減少する。この開拓地は林業収入が平均して全収入の49%、1戸当り1,191 百円に達するが林業収入の農家経済に対する貢献が、最も顕著にあらわれた特別な例といふことができる。

五稜開拓地

五稜開拓地はこの調査において1戸当り、平均農家収支が黒字になる唯一の開拓地であるが、林業収支を除いてみると27 百円の黒字ということになる。林業収支を加えることによつて354 百円に黒字が増加する。赤字農家は林業収支を除くと11 戸中5 戸であるが、林業収支を加えると赤字農家は4 戸に減少する。五稜開拓地は農業収入が他の開拓地に比してきわだつて多く、林業収支の持つウェイトはあまり大きくないが、それでも黒字を増加し、赤字農家を減少させることに役立つている。

小川開拓地

小川開拓地は林業収支がないとすると、1戸当り平均887 百円の赤字となるが、林業収支を加えた全収支では609 百円の赤字である。林業収支を加えることによつても赤字を解消することはできず、278 百円だけ赤字を減少させたにすぎない。また、林業収支を加えない場合10 戸が全部赤字であるが、加えることによつて1戸が黒字農家に転化する。ここでは林業収支が農家経済の収支決算に対してもつウェイトは相対的にあまり大きくはないが、赤字額を幾分でも減少させ、赤字農家を減少させることに役立つていることは明らかである。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地は林業収支がないとすると、1戸当り平均1,834 百円という多額の赤字になる。林業収支を加えた全収支では975 百円となる。林業収支を加えてもなお多額の赤字が残るが、その赤字減少額は859 百円にのぼる。林業収支を加えることによる赤字減

少額がこのように大きいにもかかわらず、なお多額の赤字が残るのは農業収入の過少にもとづくものである。林業収支を加えないときは10戸全部が赤字であるが、林業収支を加えることによつて1戸が黒字となる。この開拓地では林業収支は赤字額を減少させ、赤字農家を減少させるという意味で、小川開拓地と同じような役割を果しているということが出来るが、その貢献の程度は小川開拓地の場合よりも一層高いといわなければならない。

上里開拓地

上里開拓地は林業収支がないとすると、1戸当り平均355百円の赤字になる。林業収支を加えた全収支では赤字は201百円となり、154百円だけ赤字が減少することになる。赤字の減少額は少ないけれども、赤字農家は林業収支を加えることによつて11戸から9戸に減少する。上里開拓地では農業収入が比較的多く、林業収入が各地のなかで最も少ないので、林業収支のはたす赤字減少の役割は小さいが、農家全体としての赤字が少ないので、赤字農家を黒字農家に転化させる役割は果している。

大成開拓地

大成開拓地は林業収支がないとすると、1戸当り平均1,311百円という多額の赤字になる。これに林業収支を加えて全収支でみると676百円の赤字となり、赤字減少額は635百円である。この赤字減少額がこのように多くても、なおそれと同じくらいの赤字が残るのは猿払第一開拓地の場合と同様に、農業収入の過少が主な原因である。林業収支を加えないと全戸が赤字であるが、林業収支を加えるとそのうち1戸が黒字農家に転化する。林業収支は全収支の赤字を解消することはできないが、その赤字の減少額の大きさに着目すれば、その果す貢献の程度は猿払第一開拓地の場合と同様に、かなり高いものといえることができる。

林業収支が農家経済の全体の収支に対して与える影響は、開拓地によりあるいは個々の農家により、いろいろの段階があるが、黒字額を増加し、または赤字額を減少させ、ときに赤字を解消して赤字農家を黒字農家に転化させるという点で、大きな貢献を果していることは明らかに指摘できる。弥栄開拓地の場合は林業収支が赤字を解消して、ほぼ収支相つぐなわせる役割を果した例としてあげうるし、五稜開拓地は黒字額を増加させた例である。のこりの4開拓地の場合は、程度の差はあるが、林業収支が赤字額を減少させた事例である。全体を通じて、農業収入の少なかつた開拓地において林業収支の果した役割は大きかつたものといえることができる。弥栄、猿払第一および大成開拓地の場合はその好例である。自然の条件が悪く、営農の条件の未確立である開拓農家においては、農業収入が比較的少ないので、何らかの農業外収入を求めるのは当然であるが、このさいに自家労働力消化の方法として最も手近なものに林産物取得と、林業賃労働に対する就労とがあるわ

けである。農業収入の少ない農家の経済はどうしてもスケールが小さくなるので、その中で林業収支のしめる役割は大きくならざるを得ないわけである。そして表3のところでも述べたように農業収入の少ない開拓地、または農家において林業収入の比率が高くなるばかりでなく、その絶対額が高くなる傾向が指摘されるのである。

ここでは林業収支をないものと仮定した計算を行い、それに林業収支を加えたときに全収支に対する影響はどうかということを検対することによつて、農家経済に対する林業の貢献をあらわそうとしたのであるが、農業収入が少ないということと、林業に対して労働を投下する可能性なり機会があるということとが、結びついて林業収入が現出したことはいうまでもない。この場合に林業に対して自家労働を投下する可能性なり、機会なりのない場合には、農家経済が上述の林業収支を除いた計算のままで実現することはないだろう。そのときはその労働力は他の対象をもとめて消化されるだろうからである。その対象は他の賃労働のこともあるだろうし、または自家の開墾、営農のこともあるだろう。したがつて前記の仮定による林業の役割は絶対性をもつものではない。しかし、現在の条件の下であらわれた林業のウェイトを表現するにはさしつかえないと考える。

また、林業に対して労働を多投することが林業のウェイトを高くすると同時に農業の収入を低め、開拓農業を進展させる障壁になつているという見解もあるだろう。林業に投入された労働力をそれだけ自家の開墾と営農に向けたならば、農業収入を高め、ひいては林業に労働力を投入する必要性を少なくするだろうということ是可以である。しかし、この場合の農業収入の増加が直ちに林業に対する労働投下を必要としないまでに、農家経済を高めることが可能かどうかについては疑問がある。冷水害の場合などはそれが不可能なのは明白である。自家の労働力はなるべく農業に投下することが、開拓農家の営農を安定させるために必要であることは、農民自身が誰よりも良く知つてのことであつて、それをなし得ずに農業外収入を求めざるを得ないような条件が、開拓農業には一般に存在すると考えられる。

林業収入を得るための労働投下が、営農条件の確立に多少の障壁があるとしても、農家経済に対する林業収入の貢献は低く評価することはできない。

III. 労働力の配分における林業労働の地位

開拓農家経済における林業の貢献については上に述べたごとくであるが、すでに言及した如く農家における林業収入は、それが林業賃労働に就労することに由来するものであつても、また薪、木炭などの自家生産物の販売によるものであつても、大部分は自家の労働力を消化することによつて得られたものであることには間違いない。そのほかに自家用

の薪や用材を採取するために消費された労働力もあるはずなので、農家の自家労働力配分上、林業労働としてつかわれた労働力のウェイトは、かなり高いものと考えねばならないだろう。

林業労働は自家の経営または家計の内部で消費される労働力と、自家の経営外に投下される賃労働にわけて考える必要があるが、前者は自家林業すなわち販売用、自家用の林産物採取のための労働であり、後者は林業賃労働として前者と区別される。

いま各開拓地における自家労働力の配分状態を、自家農業、自家林業、林業賃労働およびその他の賃労働従事日数に分けてみると、表10のとおりである。なお、この労働力配分については、弥栄開拓地が、自家労働力配分のうち自家農業と自家林業の区分がよく分離できなかったために、分析から除いてある。弥栄開拓地では自家林業は大部分が製炭であるが、その原木は開墾の過程から生じたものを利用しており、開墾労働との区分が困難であった。

表10の稼働者数とは、自家農業従事者数とはほぼ一致するものとみてよい。自家農業とは開墾、耕種および家畜飼育労働のすべてを含むもので、農業雇労働は勿論含まれていない。(開拓農家においては一般に農業雇労働は少ないが、一部の農家に多量の雇労働力を使用する例が見られた。ここでは自家労働力の配分のみを問題とするのでふれない)

自家林業にはさきに述べたように薪、木炭などの林産物取得のための労働をすべて含み、林産物の販売用と自家用とを問わない。林業賃労働は他人に被備されるものである。

表10 自家労働力配分の状況 (1戸当り延日数)

(単位 日)

開拓地名	五稜	小川	猿払第一	上里	大成
家族数(人)	5.7	5.3	6.5	5.3	5.4
稼働者数(人)	3.1	2.8	3.4	2.6	2.8
自家農業従事日数	546	511	430	375	385
自家林業従事日数	12	41	46	18	28
林業賃労働従事日数	26	37	153	38	122
その他賃労働従事日数	6	27	33	17	36
計	590	616	662	448	571
同上比率					(%)
自家農業従事日数	93	83	65	84	68
自家林業従事日数	2	7	7	4	5
林業賃労働従事日数	4	6	23	8	21
その他賃労働従事日数	1	4	5	4	6
計	100	100	100	100	100

その他の賃労働には農業被傭をはじめ、救農土木事業などが含まれている。特殊職業(吏員など)は入らない。ここでは自家に保有している労働力のみを問題とし、他から入ってくるものは考慮していないが、農業の場合については前述のとおりであるが、林業の場合にはもつと少ない。小川開拓地において製炭のために、労働力を雇傭した農家が1戸あった。

表10によつてみると、家族数の1戸当り平均は5.3人から6.5人の間にあり、稼働者数は2.6人から3.4人の間にある。そして1年間の労働日数は1戸当り448日から662日となつている。稼働者数が3.4で最も多い猿払第一開拓地の1戸当り労働日数が662日と最高をしめし、これに対し稼働者数が2.6人で最も少ない上里開拓地では、1戸当り平均労働日数が448日で最低となつている。稼働者数と労働日数とは必ずしも比例しないが稼働者数の多いところは労働日数が多い傾向にある。いま参考のために各開拓地について自家労働力1人当りの労働日数を表10より算出すると、五稜193日、小川220日、猿払第一195日、上里172日、大成190日となる。

自家農業労働日数は最低が上里開拓地の375日、最高が五稜開拓地の546日で、これを全労働日数に対する比率でみると、猿払第一開拓地の65%から五稜開拓地の93%の範囲に分布する。自家農業労働日数は全労働日数のなかで最も大きい比率をしめるのは当然であるが、一般にかなり高いといつてよいだろう。農業労働従事日数と農業収入の大きさはあまり関係はないようであるが、比率でみると農業労働従事日数比率の高い開拓地は農業収入比率が高く、その逆に農業労働比率の低い開拓地は収入比率も低いようである。

自家林業従事日数は、最低が五稜開拓地の12日、最高が猿払第一開拓地の46日で、比率でみると、五稜開拓地の2%から猿払第一、小川両開拓地の7%となつている。これは全労働日数に対して大きな比重をしめるものとはいえない。弥栄開拓地の場合が不明であるが、これはかなり高い比率を示すはずである。

林業賃労働従事日数は最低が五稜開拓地の26日、4%、最高が猿払第一開拓地の153日23%である。猿払第一、大成両開拓地は日数で100日以上、比率で20%以上となり、労働力配分上のウェイトがかなり自家林業従事日数の場合よりも高くなつている。ここで各開拓地ごとに林業賃労働従事者数の平均と、1人当り従事日数とを示すと表11のとおりである。

表11 林業賃労働従事者数と1人当り従事日数

開 拓 地 名	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
1戸当り林業賃労働従事者数(人)	0.6	0.6	1.7	0.8	1.1
1人当り林業賃労働従事日数(日)	43	62	94	48	111

表11によると、林業労働従事者数は1戸当り、最低は五稜開拓地の0.6人、最高は猿払第一開拓地の1.7人で、1人当り従事日数は最低五稜開拓地の43日、最高は大成開拓地の111日である。1人当り従事日数がかなり大きいことに注意する必要がある。これは林業賃労働には特定の人に従事することを示すものといつてよいだろう。なお、表10において1戸当り林業賃労働従事日数の多い開拓地では、1戸当り従事者数も1人当り従事日数も高くなっている。

表10にもどつてみると、その他の賃労働従事日数は、最低が五稜開拓地の6日、1%、最高が大成開拓地の36日、6%で、あまり大きいウエイトを持たない。

いま、表10の自家林業従事日数と林業賃労働従事日数とを林業労働として一括し、各開拓地ごとの日数と全労働日数に対する比率を求めると表12のとおりである。

表12によると林業労働日数は最低が五稜開拓地の38日、6%で、最高が猿払第一開

表12 林業労働日数とその全労働日数に対する比率 (1戸当り)

開 拓 地 名	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
林業労働日数(日)	38	78	199	56	150
全労働日数に対する比率 (%)	6	13	30	12	26

拓地の199日、30%である。自家労働力配分上における林業労働の地位は開拓地によつてかなりの差異があるが、一部の開拓地においてはかなり高いものといつてよい。なかには五稜開拓地のごとくあまり問題になるほどのウエイトを持たないものもある。林業収入比率の高い猿払第一、大成両開拓地の林業労働日数および比率が高くなっているのは当然といつてよい。これに対し林業収入比率が最も低い五稜開拓地の林業労働日数および比率が低いのも自然である。

いま、各開拓地ごとに労働力配分における林業労働の関係を概観すると以下の如くである。

五稜開拓地

五稜開拓地の1戸当りの平均林業労働日数は38日で、全労働日数に対して6%に相当する。五稜開拓地は各調査開拓地の中で労働力配分上、林業労働のしめる地位は最も低く、あまり重要なものということとはできない。農家ごとにみると、全戸が何らかの林業労働に従事しており、その日数は3日から98日の間に、全労働日数に対する比率でみると0~24%の間に分布している。大ていの農家は10%にみたない。この開拓地では林業労働のうち賃労働従事日数の方がいく分多くなっているが、林業賃労働に従事しているのは6戸で、そのうちの1戸は2人、他は1人が就労した。林業賃労働に対しては各農家の中の特定の者が従事している。

小川開拓地

小川開拓地の1戸当り平均林業労働日数は78日で、全労働日数に対して13%にあたる。五稜開拓地の場合よりもかなり高いウェイトを持っているといえよう。開拓地内の農家ごとにみると、10戸の中で1戸に林業労働日数が全くないものがあるが、他の9戸は何らかの林業労働に従事している。日数では20日から215日の間に、全労働日数に対する比率では3%から26%の間に分布している。この開拓地では林業労働のうち自家林業に従事する日数の方が全体としていく分多いが、ほぼ相半ばするとみてよい。林業賃労働に従事しているのは10戸中6戸であるが、その農家では林業賃労働に従事するものは1戸1人でその日数は5日から175日という大きな範囲の中にある。

猿払第一開拓地

猿払第一開拓地の1戸当り平均林業労働従事日数は199日、全労働日数に対して30%という高い比率を示している。各開拓地の中で林業労働のしめる地位が最も高いケースとなつている。各農家ごとにみると、各戸とも全部林業労働に従事するが、その日数は38日から432日の間、比率では10%から47%の範囲に分布している。農家によつて林業労働のしめる比重に差があることは他の開拓地と同様であるが、農家ごとにみた比重も一般的に高く、一部の農家では自家農業労働に投下した労働日数に匹敵しようとするものもみられる。この開拓地では林業労働のうち賃労働に対する労働投下が、自家林業に対するものよりもはるかに大きな量を示しており、全農家が賃労働に従事し、1戸で1人だけ従事する農家は4戸、2人の農家は5戸、3人が1戸というように、1戸当り林業賃労働従事者数も多くなつている。林業賃労働の従事日数は1戸当り20日から392日という広範囲に分布している。

上里開拓地

上里開拓地の1戸当り平均林業労働日数は56日、全労働日数に対して12%の比率を示している。各農家ごとにみると全戸が林業労働に従事し、その日数は40日から145日、比率では1%から33%の間にある。全労働日数に対する林業労働のウェイトは、小川開拓地の場合に近いものとみることができ、ここでは自家林業よりも林業賃労働の方がウェイトが大きい。林業賃労働のみについてみると、12戸(平均は10戸で算出した)のうち7戸がこれに従事し、そのうち5戸は各戸から1人、2は各戸から2人が従事している。その1戸当り賃労働日数は5日から104日の間に分布している。

大成開拓地

大成開拓地の1戸当り平均林業労働日数は150日、全労働日数に対する比率は26%となる。各開拓地のなかで、自家労働力配分上、林業労働のしめる地位が猿払第一開拓地の場合について大きく、ほとんどこれに接近している。各農家とも全部、林業労働に従事

しているがその日数は25日から256日の範囲に、比率では5%から34%の範囲に分布している。農家によつて林業労働の比重に差はあるが、一般的に猿払第一開拓地以外の他の開拓地よりも高いようである。この開拓地でも猿払第一開拓地と同じように、林業労働のうちで賃労働が自家林業よりもはるかに大きい。林業賃労働には10戸のうち9戸が従事しているが、1戸で3人従事しているのが1戸あり、他は1戸1人である。その1戸当り従事日数は30日から356日の間にある。

開拓地農家の自家労働力配分上における林業労働の地位と、林業労働の内容については上にのべたところで大よそ知られるのであるが、その労働力配分上における林業労働の地位は、開拓地によつて、あるいは個々の農家によつてかなりの差異があることが知られた。いま、全自家労働力の配分上における林業労働比率の分布状況を、開拓地別に表にすると、表13のとおりである。

表13によると、林業労働比率のばらつきを中心は、平均林業労働比率の低い開拓地においては低く、その高い開拓地において高くあらわれる傾向がある。すなわち、五稜開拓地は最も低い所に中心があらわれ、猿払第一と大成開拓地は比較的高めに分散している。小川と上里両開拓地はその中間にある。

自家労働力配分上において林業労働のしめる地位と、その林業労働の内容によつて開

表13 林業労働比率別戸数

(単位 戸)

開 拓 地 名	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
平均林業労働比率	6	13	30	12	26
0	—	1	—	—	—
~10%	9	4	1	6	1
~20	1	3	3	4	3
~30	1	2	3	1	3
~40	—	—	—	1	2
~50	—	—	3	—	1
計	11	10	10	12	10

註 0は林業労働の全くないものを示す。

拓地農業と林業との関連を類型化すると、第一に猿払第一、大成両開拓地のように林業労働のしめる地位がかなり高い開拓地がある。これはさらにその主体とする労働の種類が自家林業すなわち、林産物取得のための経営内投下であるか、賃労働に対する経営外投下であるかによつて区別される。猿払第一と大成両開拓地は後者に属するものであり、ここでは資料を得られなかつたが、弥栄開拓地は前者に属するものであろう。第二に五稜開拓地

のように林業労働の地位が相対的に低く、あまり問題にしないでも良い開拓地である。これもさらに林業労働のうち自家林業を主とするか、賃労働を主とするか、または両者併立するかによつて分けられるが、ここではその区別はあまり重要ではない。投下される労働量が少ないからである。五稜開拓地はしいていば賃労働を主とするものといえよう。

第三に第一と第二の中間型として小川開拓地と、上里開拓地のようなケースがある。これは第一と第二の間に段階的にあるいは連続的に、林業労働比率の大きさにしたがって存在するものといえよう。この型も賃労働を主とするものと自家林業を主とするものに区別される。小川開拓地は自家林業と賃労働とがほぼ半々である例であり、上里開拓地は賃労働を主とするものである。

さきに述べたように、農家経済の中の林業収入は賃労働収入と薪、木炭など林産物の販売代金であるが、これはいずれもほとんど自家労働の消化にもとづいてもたらされたものである。ここであげた林業労働のなかには自家消費の林産物を含むので、従事日数の全部が林業収入のために投下されたものということとはできないが、林業労働日数とその比率の高い開拓地ほど、林業収入の額が大きくなることは当然である。表12と表3とを対比してみるとこのことがはつきりとわかる。

本来は開墾労働または農業労働に投入されるべき農家の自家労働力が、林業労働として農業外にしかも一部は農家外に投入され、その比率が各開拓地で6%ないし30%に達し、農家によつてはより高い比率を示すのであるが、これは劣悪な自然的、社会的条件のために、あるいは天災等の臨時的事情のために、農業所得が十分に得られないときは、開墾労働ないし農業労働よりも、もつと容易に所得を実現できる林業労働に自家労働力が指向することの結果である。すなわち自家労働の一部が割高な林業労働におきかえられるわけである。農業経営上からみたこのことの是非は別として、開拓農家経済上、林業労働の地位は無視し得ないものである。

IV. 農家の林野利用状況

開拓地の農家経済における林業の役割と、自家労働力の配分上からみた林業労働の地位は、開拓地により、あるいは農家によつて著しい差異はあるが、かなり大きい役割を果していることは上に述べてきたとおりである。しかし、林業が開拓農家に対して果している役割は単にこれだけにとどまるものではなく、林野そのものが農家の生活や経営に密接なつながりを持っていて、その中で果す役割も無視することができない。ここで農家の林野利用というのは農家はその生活や、経営の中で林野と林野の上に存在する樹木や草を、どのように利用し、農家経済の中にくみ入れているかということである。すでに前述の農

家経済の項で薪、木炭などの販売収入すなわち林産物収得としてあげたもの、また、労働力の配分で自家林業の分としてあげたものなどはその一部をなすものである。このように数字的に表現できるものもあるが、放牧採草の場としての林野利用などのように数字で示すことが困難なものもある。

自家所有の林野の利用を開拓農家の生活ないし、営農に関連して考えれば次の如き利用の仕方が認められる。

第一に販売用の薪、木炭などの原木の供給源としての林野。これが現金収入として実現したのが、農家経済の林業収入の中で薪、木炭などの販売代金としてかかげたものである。この中には原木または立木を他より購入したものもあるが、大部分は自家の配当地上のもので利用したものである。

第二に自家用の薪、用材などの供給源としての林野。これは林野そのものとしては第一のものと共通であるが、現金化していないので、この調査では計上していない。しかし冬季間の長い北海道の農家において、自家用の薪の必要性は生活上ないし営農上からいつて極めて重要なものであることはいうまでもない。開拓農家の中には国有林などから薪の払下を受けているものもある。自家用の用材についても建設途上における開拓農家にとつてその重要性は、一般既存農家よりも著しいと考えてよい。

第一と第二の利用の仕方は林野利用とはいっても、実際には開拓地上に残存している立木や、開墾の過程のなかから生じた樹木の利用にすぎないのであつて、計画的、育成的な林野利用ではない。そこにある樹木が邪魔になるから、あるいは生活に必要であるから取り去つて利用したにすぎないのである。この点は開拓の過程において、ある程度やむを得ないことである。薪炭備林などという名目の附帯地の合理的経営はほとんど無視されている状態である。

第三に放牧、採草の場としての林野。大ていの開拓地は主畜農業ないし混同農業を目標とし、その方向で経営が行われているので、家畜飼養のための労働力と飼糧は重要である。放牧は家畜飼育労働力と飼糧の節約のために大ていの開拓地において行われる。また採草も家畜の飼料、しきわら、厩堆肥の原料とするために広く行われる。

第四に造林を行う場としての林野。開拓地では制度上の制約もあり、また土地利用区分の未確定、労働力の不足などが原因となつて、造林は非常に少ないが、一部では将来の森林資源を目的とし、または防風などの間接的効果を目的として造林が行われている。

林野の利用の仕方としては以上の4に限らないであろうが、開拓地で現に主として行われているものは大体これに含まれるものと考えてよい。これらのうち、第一と第二の形の利用は林業収入のうちの林産物販売収入、または林業労働のうちの自家林業労働としてその利用の程度や果す役割をあらわすことができるが、第三のものについては計量化が困

難である。第四の造林はその効果の実現は将来に期待されるもので、直接的には現在の農家経済に影響をおよぼしていない。

以上の林野利用状況を数量的に表現することは容易ではないが、利用戸数をかんたんに表示すると表14のとおりである。

表14 林野利用状況

開拓地名	弥栄	五稜	小川	猿払第一	上里	大成
1戸当り附帯林野面積(反)	108	8.6	45.1	76.6	82.1	120.6
1戸当り配当地面積(反)	203	81.6	107	147.2	113.5	179.7
販売用林産物採取戸数	10	8	4	6	5	4
自家用林産物採取戸数	10	11	10	10	12	10
放牧戸数	10	6	10	8	12	10
採草戸数	10	1	9	5	11	10
造林戸数	10	—	6	—	5	6

註 弥栄開拓地の附帯林野は樹林地の面積のみを示す。

表14にあげたのは利用の数量は別として、ともかく少しでも利用している農家の戸数をあげたものであつて、これでは各開拓地ごとの利用の程度を示すことにはならない。数量的に表示することが困難なものが多いので、このようにしてあらわしたのであるが具体的には各開拓地ごとにのちに述べることにする。

表14において附帯林野というのは耕作に利用するもの以外に、附帯地として配当された薪炭林、採草地、放牧地などの合計であつて配当地面積の内数である。配当地の面積が開拓地によつて非常に差があるため、附帯林野の面積が開拓地によつてまちまちである。林野のとくに多いのは弥栄、大成などの開拓地であり、五稜開拓地は非常に少ない。

販売用林産物を採取した戸数は、必ずしも附帯林野の大きさに比例しない。これは林野の立木状態によつても異なるし、また開墾地上から採取する場合もあるからである。

自家用林産物はほとんどが薪であるが、これは開墾の過程から生ずる根株、枝条などを主として利用し、販売用薪の如く形が整えられることがないので、その数量は把握しがたいが、最も広汎に行われる利用形態であることは明らかである。

放牧、繋牧に林野を利用することも広く行われている。採草は放牧、繋牧利用よりも少ないようであるが、五稜開拓地以外の開拓地では一般的な利用型である。

造林の場としての利用は五稜、猿払第一の両開拓地になく、他の開拓地にはあるが、この型の利用の仕方は最も少ないようである。

いま、各開拓地ごとに少しく立入つて林野利用の状況を見ると以下のとおりである。

彌栄開拓地

彌栄開拓地は配当地面積が最も大きく、したがって附帯林野面積も広い。そればかりではなく、配当地上の樹木が豊富であつたため、林産物採取、とくに販売用のそれが最も盛である。販売用林産物の主要なものは木炭で、薪および用材もある。木炭は販売量1戸当り平均255俵に達する。放牧、繋牧も盛んであるが、(最大の利用面積1戸で10町という例がある。)採草も行われその数量は1戸当り100~1000貫である。放牧は共有地も利用される。造林は各戸とも行っているが最大は面積2町歩に達する。

五稜開拓地

ここは配当地面積そのものが小さいので、附帯林野の面積もきわめてすくない。したがって林野利用の状況ははなはだふるわぬ。販売用林産物は薪が主で、木炭もある。採取利用戸数の多い割合に数量は少ない。薪は3~30シキである。自家用薪の一部は国有林より払下を受けている。放牧、繋牧は一部に行われるが、それに使用される林野面積はきわめて少なく、0.3町ないし1.5町である。

小川開拓地

販売用林産物の主なものは木炭で薪も一部にある。林産物を販売用として採取した戸数は4戸にすぎない。木炭の販売数量は10~150俵である。放牧、繋牧は最も広く行われ放牧日数は100~150日ぐらいである。その管農に対する役割は大きい。採草は規模もとくに小さくはない。(最高は2,700束)放牧採草は自家の配当地以外のところも利用される。造林は小規模で実施農家1戸当り数反の程度である。

猿払第一開拓地

この開拓地の販売用林産物は木炭と薪が主なものである。戸数は少ないわりに1戸当りの取扱数量が多いが、この中には他の森林より買入れた立木によつて生産したものも含まれており、自家の配当地からのもののみではない。放牧、繋牧は利用面積はあまり大きくないが(0.6~2.5町)、比較的良好に利用され、配当地以外に村有牧場も利用される。採草は利用戸数も少ないが、利用農家の採草量も多くない。

上里開拓地

販売用林産物の主なものは木炭で、これに薪が少量あるが、木炭も数量は多くない。自家用薪の一部は道有林より払下を受けている。放牧、繋牧、採草は広く行われその利用面積および数量は小さくない。(放牧日数60~200日、採草量100~1,000貫)造林は極めて小規模で実施農家1戸当り1反の程度である。

大成開拓地

販売用林産物は木炭と薪であるが、その数量は極めて少なく五稜開拓地に匹敵する。自家用薪の一部は道有林より払下げられる。放牧、繋牧と採草は最も広汎に行われている

利用型であるが、その数量もかなりのものになり(放牧日数 77 日間、採草量 200~1,300 貫)、この開拓地において最も基本的な林野利用である。造林は 1 戸当り 3~7 反である。

以上によつてみると、弥栄開拓地は販売用林産物の採取、放牧採草を、小川開拓地、猿払第一開拓地、上里開拓地、大成開拓地は放牧採草を林野利用の基本的な型としていることができる。五稜開拓地はいずれの利用型ということもできない。林野面積の少ないためである。各開拓地を通じて自家用薪の給源としての林野利用は共通している。

開拓農家の林野利用は以上のように概観することができるが、これは現実にそうなつていっていることであつて、これで良いということではない。たとえば、林産物の供給源としての林野の利用は実際にはそこにある資源を、採取しているにすぎないのであつて、資源がなくなると自家用の薪も採取できなくなることは明らかである。また、放牧採草の利用の仕方も無計画で掠奪的である。

しかし、このような利用の仕方が現実に行われ、それが農家経済に対して少なくとも過渡的には貢献しているということは事実として指摘されなければならないだろう。

結 言

開拓地農家経済における林業の貢献の仕方ないしは林業の地位について、上に述べてきたところを要約して示すと次のようになる。

(1) 農家現金収入のうち林業収入のしめる比率は 10~49% で、林業収入の内容は林産物販売を主とするものと賃労働の賃銀収入を主とするものがある。

(2) 林業の収入支出をないものと考えた場合の農家現金収支と、林業収支を含めた全収支を比較すると、林業収支は農家の全経済に対して、黒字額を増加し、赤字を解消し、あるいは赤字額を減少する役割を果す。

(3) (1) と (2) の面における林業の貢献の程度は農家により、あるいは開拓地によつて大きなひらきがあるが、冷害などによつて農業収入額の少ない農家あるいは開拓地においてより大きい。

(4) 農家の自家労働力配分上において、林業労働のしめる比率は 6~30% で、林業収入の多い農家あるいは開拓地においてより高い。林業労働の内容は林産物取得のための自家林業労働を主とするものと賃労働を主とするものがある。

(5) 林野利用の仕方は、第一に販売用林産物の供給源、第二に自家用林産物の供給源、第三に放牧、採草の場、第四に造林を行う場の四つの型に区分される。第一は林業収入源として重要であるが、臨時的過渡的のものである。第二、第三の型が最も基本的な型で、

広汎に行われる。第四の型は将来の課題とされるものである。

各開拓地について上記の関係を一覽的に示すと表 15 の如くである。

表 15 農家経済における林業の貢献

開拓地名	弥 栄	五 稜	小 川	猿払第一	上 里	大 成
林業収入比率	49%	10%	24%	41%	17%	42%
林産物売払を主とするか 賃収入を主とするか	林産物売払型	並行型	並行型	賃収入型	賃収入型	賃収入型
全収支に対する林業収支の影響 ⁽¹⁾	赤字解消 1,032 百円	黒字額増加 327 百円	赤字額減少 278 百円	赤字額減少 859 百円	赤字額減少 154 百円	赤字額減少 635 百円
林業労働比率	不詳	6%	13%	30%	12%	26%
自家林業を主とするか 賃労働を主とするか	自家林業型	少しく賃労働型	並行型	賃労働型	賃労働型	賃労働型
林野利用型	販売用林産物採取型 放牧採草型	寡少利用型	放牧採草型	放牧採草型	放牧採草型	放牧採草型

注 1: 金額は 1 戸当りの影響額である。

表 15 は各開拓地における農家経済に対する林業の貢献の程度と貢献の仕方について、一覽的にみたものであるが、一見してその程度なり仕方なりに、開拓地によつてかなりの差異があることが知られる。そして程度の差はあるが、各開拓地において林業が何らかの役割を果していることも明らかである。弥栄開拓地のような林業の地位がきわめて高く、しかも林産物売払型に属するものは、特別なめぐまれた条件のもとで成立つものとして、特殊型に属するものと考えてよいだろう。一般的には猿払第一、上里、大成の 3 開拓地のような賃労働型か五稜、小川開拓地のような並行型が普遍的な型といえることができるだろう。

各開拓地における林業のこのような貢献の度合なり、仕方なりは固定的なものと考えてはならない。たまたま調査した年に上記のような結果を示したのであつて、このような関係は流動的経過的なものと考えべきだろう。開墾の進行度、配当地上の樹木の除去状況、農業経営基盤の確立の程度、農業収穫の多寡、冷水害の有無などによつて変化するのである。弥栄開拓地の場合であつても、配当地上の樹木が少なくなつた場合には、いつまでも上述のような林業収入比率や林業労働比率をとり得ないし、林業収入源も変化せざるを得ないだろう。また、猿払第一、大成両開拓地は冷水害の被害を強く受け、農業収入が極めて少なかつたのが、上記のような林業の役割を現出せしめたものと考えてよい。

このように開拓農業における林業の役割は、変化し流動するものと考えられるのであ

るが、営農の条件を確立するまでの時期、あるいは冷水害の年などにおいては、農業外収入の必要性にかんがみて、林業の果す役割はとくに大きいと考えられる。ところで、これらの開拓地はいずれも入植後すでに調査実施時まで、7~11年を経過しているのであつて、この間においてなお本調査のような結果を示すのであるから、将来の問題としても林業の貢献を無視することは困難であろう。

以上によつて、開拓地農業における林業の貢献を事実として扱った結果を述べたのであるが、このような林業の農業に対する貢献の仕方は甚だ消極的なものといわなければならないだろう。というのは、林業収入の一半は残存樹木の単なる採取によるものであり他の一半は林業賃労働収入であつて、林業収入それ自体が計画的生産的のものでもなく、農業に有機的に組合わされた結果でもない。そして、この林業収入は調査の結果によれば大半は農家の生活費として消費されているか、赤字を補填するのに用いられた。これが農家の内部に経営資本として蓄積されるならば、積極的な意味を持ち得るのであるが、そのような傾向のあつたのは弥栄開拓地においてのみであつた。

林業労働について考えても同様であり、自家林業に対する労働投下は一応は経営内に対する投下と考えられるが、これも内部に蓄積されることがなかつたのは林業収入のところでみたとおりである。

林野利用の面では第一と第二の林産物供給源としての林野利用は急速に行きづまり、自家用薪の供給にも困難となる可能性がある。第三の採草放牧も掠奪的である。

このように、現在の林業の貢献の仕方には将来に向つて考えると大きな問題がある。開拓の途次の過渡的なものとして、また、凶荒対応策として、林業が開拓農家の生活、経済に果たした役割は一応認めなければならないが、林業が真に開拓農家の経営安定に役立つためには、さらに一步をすすめて、林業収入がなるべく経営内に蓄積されるように、林業労働力はなるべく経営内に投下されるように、さらに林野利用の面では放牧採草を計画的に経営にくみ入れるように、同時に造林の利用に指向するようになる必要がある。きわめて困難な課題ではあろうが。

さらに積極的には、開拓農家の経営の内部に林業経営ないし林野利用が有機的に結びつけられる必要がある。主畜農業ないし混同農業を目標として開拓農家を創設し、そこに安定した農業経営と農民の生活を建設しようとするには、耕種農業と畜産のほかに林業を加えて多角化することがある程度必要なことが次第に明らかになつている。たとえばこの調査の結果にあらわれたような、自家用薪を主とする林産物の供給源としての林野利用、放牧採草用地としての林野利用などは、今後も長く経常的に継続しなければならぬ性質のものである。造林にしても農業収入の不安定を補う源泉として、また不時の出費に対する財源として、将来の農家経済安定のために経営内にくみ入れることが希まれるのである。

このように林業を農家の経営内に有機的にくみ入れるためには、1戸当りの配当地が現在のままで良いか、林野はどのくらいあつたら良いかなどの諸点、すなわち配当地の適正規模と其中的林野比率を再検討する必要がある。また労働力の配分に対しても十分な配慮が必要となってくる。これらは立地条件、営農方式などによつていろいろの組合せが考えられなければならないだろうが、この点については、なお今後の研究にまたねばならない。

Summary

It is a self-evident fact that the relationship between agriculture and forestry is generally so intimate that farm management can not be further improved without use being made of forest land.

The writers are convinced that such relationship would be even more remarkable under bad situations due to the low grade of natural environment and low level of social-economic conditions such as are often exist in the newly developed land.

The purpose of this paper is to find out clearly in what form and to what degree the utilization of forest land is contributing to farm-management in the newly developed land.

From the viewpoint mentioned above, the writers have selected 6 places in various parts of Hokkaido. Their circumstances—location, climate, etc.—are different from each other. This survey was carried out during the period from 1953 to 1956 annually. Sixty three farm-homes were investigated by the method of visiting each house.

The results obtained from this investigation are summarized as follows:

I. *On the part that forestry plays in cash income and its outgo.*

The forestry income comprising the wage of forest labour and the sale forest products, is between 10 and 49 percent of the whole cash receipt of each farmer.

It is clear that this occupies a comparatively large part in the total cash income of the farmers living in the newly developed land. However, comparison of the weight of forestry income gained by each farmer shows a fair variation among them.

On the other hand, forestry expenditure is within 6 percent of the whole cash outgo.

It can be pointed out that forestry income clearly has an important role in "increasing black-ink figures" and in covering or eliminating deficit.

II. *On the distribution of families' labour power.*

The number of days worked in forestry is between 6 and 30 percent of the whole working day throughout the year. Therefore, it occupies an important weight in the distribution of families' labour power. The forest labour may be broadly divided into two categories such as the labour to acquire wages in other places and that in their own forest.

III. *On the utilization of forest land.*

The forest land is utilized pretty well with regards to fuel wood making, grass gathering and grazing. On the other hand, reforestation has generally not yet been carried out in each of the 6 localities. Such a situation does not mean a reasonable utilization of the forest land. Grass gathering and grazing have been done by the farmers in order to save their stock-breeding labour power and fodder in the newly developed land, where stock-breeding has an important role for improving bad site conditions.

In short, it is recognized that the weight of forestry in the farm management and household operation in newly developed land is fairly large, however, the present state of combination of agriculture and forestry is far from the ideal management of its kind.

The writers are convinced that it is highly necessary to manage private individually owned small forest tracts by more reasonable and proper means in order to stabilize farm operations.